

[Research Report]

Toward Search of Community Resources that will be the Evidences of Suicide Prevention for Working People Living a City

— Based on the findings of pretest that examined the relation between the sense of coherence of undergraduate students
of co-medical university and local solidarity —

Hideki Kishida* and Manabu Ashikaga*

* Aino University

Abstract

BACKGROUND and PURPOSE : in order to search the evidences for suicide prevention of which target is working people who live in a city, we are preparing a questionnaire survey for city residents. In that process, we need to examine which and how factors of local solidarity are influential with the sense of coherence (SOC) of residents. **OBJECTS** : 235 undergraduate students of a co-medical university in Osaka prefecture. **METHOD** : questionnaire survey of which key scale is SOC-13 scale (range : 13-91), and we examine significant differences among SOC means of plural groups which are classified in according with the classification of each factors of local solidarity. **RESULTS** : SOC mean of 235 students is 48.1 (SD : 9.8), Cronbach's α is 0.77, and significant differences are identified in "solitude or not" ($p < .05$), "residence period" and "attachment to resident place". Compared with SOC means of permanent or temporary residents ($p < .01$), significantly high is that of long-term residents who experienced a move. SOC mean of residents who hope to stay here is significantly higher than that of residents who hope to go away ($p < .01$). **DISCUSSION** : the questionnaire items mentioned above give us sure vistas on next survey, but we need to work out the questionnaire items of which purpose is measurement of density and intensity of local solidarity.

Key Words : city, suicide prevention, salutogenesis theory, sense of coherence (SOC), Generalized resistant resources (GRRs)

都市勤労者型自殺予防のための地域的資源の検索に向けて

—— 医療系大学生の首尾一貫感覚 (SOC) と地域的連帯との関係についての
プレテストに基づいて ——

岸 田 秀 樹*・足 利 学*

【要 旨】 都市勤労者型自殺予防策のエビデンス検索を目的とする住民アンケート調査準備のため、地域的連帯を構成する諸要因が住民の首尾一貫感覚 (SOC) にどの程度影響しているか、を検討した。対象は大阪府の医療系大学学生 235 名であり、方法は SOC 尺度 (13 項目版: 13-91) を軸とする質問紙調査を実施し、地域関連項目により分類した複数群の SOC 平均値間の有意差を検定した。結果、235 名の SOC 平均値と標準偏差値は 48.1 ± 9.8 であり、クロンバックの α 係数は 0.77、有意差は「同居者の有無」、「居住期間」、「居住地愛着」で認められた。SOC 平均値は転居経験のある長期居住者の方が定住者や短期居住者より有意に高く、愛着がある方がない方より有意に高かった。以上から上記質問項目の見通しが立ったが、地域的連帯の密度・強度の測定に工夫が必要になった。

キーワード: 都市, 自殺予防, 健康生成論, 首尾一貫感覚 (SOC), 一般抵抗資源 (GRRs)

I はじめに

1998 年以来 10 年以上に及ぶ年間自殺死亡数 3 万人超という国民社会の危機は、東京、大阪とその周辺の大都市圏における自殺死亡数の増加、中年期男性の自殺死亡数の増加、さらに自殺多発年齢の若年化の進行によって特徴付けられる。従って、現今の危機に対処するには従来の農村高齢者型に加え、都市勤労者型の自殺予防が必要になっている。

また自殺の原因はきわめて複雑であり、その予防のためには自殺の類型論とそれに応じた多数の対策が必要になる。自殺行為に走る個人の意志や動機を対象とする医療的個人介入から、そうした意志や動機に働きかけている多様な社会的要因に対応する社会政策の立案まで、その両極を埋め、つなぐ多種多様な対策を開

発する余地が広がっている。

そうした心理・社会的要因に対応する戦略的行動を、アントノフスキー (Aaron Antonovsky) の健康生成論¹⁾を援用して提示すれば、

- 1) 自殺行為を促進するリスク要因を発見し、それを抑止する、
- 2) 自殺行為を抑止する健康要因を発見し、それを促進する、とすることができる。

本研究の最終目的は、都市勤労者型の自殺予防対策の開発である。それにはまず、都市生活のなかに上記リスク要因・健康要因を発見しなければならない。本研究では、1998 年の自殺率急騰後、その変動が対照的な大阪市近郊の 2 地域、比較的短期間に下落した I 市と高止まりしている MK 市をフィールドとした、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence, 以下、SOC と略

* 藍野大学

記する)の測定を軸とする住民アンケート調査を計画している。

SOCはアントノフスキーの健康生成論の中心概念であり、ナチス強制収容所の悲惨な経験にも係らず、健康を維持・増進している生還者に共通に見出されたストレス対処能力、健康維持能力といった「生きる力」の核心にある感覚である。またその測定尺度(以下、SOC尺度)がアントノフスキー自身により開発され、かれ自身を含む複数の著者²⁻⁴⁾による総説によってその妥当性と信頼性が検証されている。

SOCが「生きる力」の指標であるとすれば、極端に低いSOC得点は回答者自身の自殺抵抗力の脆弱性を推論させ、実際にSOC尺度を用いた自殺関連の先行研究は⁵⁻⁷⁾そうした仮説を支持している。SOC得点に影響を与える環境的要因、特にストレスに対する一般抵抗資源(Generalized Resistant Resources; GRRs)を絞り込むことができれば、自殺予防対策を開発するためのエビデンスとすることができる。

また、従来、社会環境と自殺率との共変関係は既存統計に基づいてさまざまに観察されてきたが、社会経済的環境の変動がなぜ自殺率を変動させるのか、についての説明は必ずしも明快ではなかった。SOCは、上記のように社会環境(住民の集合行動)と自殺率(個人的行動)を橋渡しすることによって、より明快な説明のために役立つであろう。

今回の報告は、住民アンケート調査に使用する調査票作成のために行なった、医療系大学生を対象とするプレテストの結果とその考察である。考察の目的は、地域的連帯のどのような要因がどれくらい住民のSOCに影響するか、の見通しを立てることであり、それに基づいて住民アンケート調査票を改良することである。

II 対象と方法

1) 調査対象

大阪府所在の医療系大学の学生、1回生~4回生391人。

2) 調査方法

自記式質問紙によるアンケート調査を行う。期間は2008年12月の第1週である。いくつかの講義の終了後、調査目的を説明する文書を表紙とする調査票を学生に配布し、文書および口頭で調査目的を説明し、調査票回収によって同意成立と見なし、未回収は同意不成立と見なす。

質問項目は、SOC13項目版と地域生活に関する質問7問である。SOC13項目版は7件法で得点範囲は13~91点、得点が高い方がストレス対処能力、健康保持能力が高いと判断する。なおSOC13項目版の使用に当たって、英語原典から、なるべく日本語の日常用語に近づくように自殺予防研究会において検討し、翻訳した。

SOC尺度は以下の3因子により構成されている。すなわち、

- (1) 把握可能感：自分の内的・外的環境に生じる出来事を予見し、説明することができると感じる程度、
- (2) 処理可能感：そうした出来事に対処する諸資源を自由に使うことができると感じる程度、
- (3) 有意義感：そうした出来事に係ることが自分にとって挑戦であり、心身を投入するに値するという確信の程度、である。

地域的連帯に関連する質問は、同居者の有無、居住形態、居住期間、居住地愛着、アルバイト頻度(4月~11月)、地域の参加団体・活動、社会的サポート、である。

3) 分析方法

個人属性(性別)および地域生活に関連する質問の回答によって回答者を分類し、それぞれのカテゴリーのSOC平均値間の有意差を検定する。

III 結果

回収241票(回収率61.6%)、そのうちSOC尺度の回答に欠損のない235票(有効回答率97.5%)を以下の分析対象とした。

1) SOC平均値および性別

分析対象のSOC平均値および標準偏差値(SD)は、 48.1 ± 9.8 であった。クロンバックの α 係数は、0.77であった。

男女別SOC平均値間および3因子各平均値間の検定結果は、表1の通りである。SOC平均値は男性の方が女性より有意に高かった($p < .05$)。3因子で見ると、把握可能感において有意差が認められた($p < .01$)。

2) 同居者の有無

同居者の有無について「一人暮らし」と「同居者あ

表1

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
男 (n=109)	49.8±9.5	18.6±4.2	14.5±4.0	16.8±4.1
女 (n=116)	47.1±9.7	16.4±4.5	14.1±3.7	16.7±4.0
p 値	0.037	0.000	0.389	0.932

表2

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
一人暮らし (n=63)	45.6±9.7	17.1±4.4	13.3±3.9	15.2±4.4
同居者あり (n=172)	49.1±9.7	17.5±4.6	14.5±3.8	17.1±3.8
p 値	0.015	0.591	0.034	0.001

り」との間の検定結果は、表2の通りである。SOC 平均値は「同居者あり」の方が「一人暮らし」より有意に高かった ($p < .05$)。3 因子では、処理可能感 ($p < .05$)、有意義感 ($p < .01$) で有意差が認められた。

3) 居住形態

持ち家、賃貸住宅、公営住宅、間借から該当する項目を選択してもらった。持ち家 (n=149) とその他 (n=86) に分類し、それぞれのSOC 平均値と検定結果を表3に示した。有意差は $p < .1$ に止まった。

4) 居住期間

居住期間は、3 年間刻みで該当する期間を選択してもらった。各期間の回答者数、SOC 平均値は表4-1の通りである。さらに回答者を下記のように分類した。

居住期間6年未満の78名中60名(76.9%)が「一人暮らし」であった。この60名の居住形態のうち、無回答2名を除き、57名が「賃貸」、1名が「間借」であることから、かれらは大学進学を契機に「一人暮

らし」を始めた転居者を中核とする「短期居住者」を構成すると考えられる。

他方、居住期間18年以上は入学年齢以上の期間となり、105名中94名の居住形態が「持ち家」であることから、かれらは現居住地で生まれ育った「定住者」を構成すると考えられる。そして、「短期居住者」と「定住者」の他に、転居を経験しつつも比較的長期にわたって現居住地に生活する「長期居住者」の存在を確認することができる。

短期居住者、長期居住者、定住者のSOC および3 因子の平均値は、表4-2の通りである。SOC 平均値は長期居住者が最高で、定住者、短期居住者の順に低くなる。3 因子の平均値も同様の順になった。

上記3者間の有意差の検定結果は、表4-3の通りである。SOC 平均値は、長期居住者が短期居住者よりも有意に高く ($p < .01$)、定住者が短期居住者よりも有意に高かった ($p < .05$)。長期居住者と定住者との間には、有意差は認められなかった。結局、短期居住者のSOC 平均値の低さが際立つ結果となっている。

表3

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
持ち家 (n=144)	49.0± 9.5	17.5±4.5	14.5±3.7	17.0±3.6
その他 (n=86)	48.2±10.0	17.4±4.7	14.1±4.1	16.7±4.5
p 値	0.096	0.645	0.082	0.064

表4-1 居住期間 (分類)

居住期間 (年)	n	SOC 平均値	分類
~3	59	46.1	短期居住者
3~6	19	44.3	
6~9	7	49.6	
9~12	13	51.8	長期居住者
12~15	14	49.6	
15~18	16	51.9	
18~	105	48.8	定住者

表4-2 居住期間 (分類別平均値)

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
x 短期居住者	45.6	17.1	13.2	15.3
y 長期居住者	50.9	17.7	15.4	17.8
z 定住者	48.8	17.5	14.2	17.1

表4-3 居住期間 (検定)

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
x-y	0.003	0.408	0.002	0.001
y-z	0.191	0.792	0.073	0.239
z-x	0.035	0.539	0.106	0.003

3 因子では、やはり長期居住者と短期居住者の間で、処理可能感と有意義感で有意差が認められた（ともに $p < .01$ ）。定住者と短期居住者の間では、有意義感で有意差が認められた（ $p < .01$ ）。有意義感における有意な低さが、短期居住者の諸他に対する特徴であることが確認できた。

5) 居住地愛着

今後住み続けたい（居住希望）、早速退去したい（退去希望）、特に考えていない（考えない）から選択してもらった。SOC 平均値および 3 因子では「居住希望」が最も高く、「考えない」、「退去希望」の順に低くなった（表 5-1）。

上記 3 者間の有意差の検定結果は、表 5-2 の通りである。「退去希望」は「居住希望」、「考えない」に対して有意に SOC 平均値が低い（ともに $p < .01$ ）。3 因子で見ると、処理可能感、有意義感で有意差が認められた。「退去希望」と「考えない」との間には有意差は認められなかったが、3 因子では有意義感で有意差が認められた（ $p < .05$ ）。

表 5-1 居住地愛着（平均値）

		SOC 平均値	把握	処理	有意義
x	居住希望 (n=96)	49.8	17.6	14.6	17.6
y	退去希望 (n=32)	43.4	16.7	12.3	14.4
z	考えなし (n=105)	48.1	17.4	14.3	16.4

表 5-2 居住地愛着（検定）

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
x-y	0.003	0.394	0.007	0.000
y-z	0.009	0.379	0.006	0.011
z-x	0.216	0.859	0.567	0.021

4) アルバイト頻度

2008 年度 4 月～11 月の間に、アルバイトをしたか、した場合には、不定期であったか、定期的であったかを質問した。

しかしアルバイトをしなかった者、不定期でした者、定期的にした者による分類によっても、定期的にした者の週 1 回、週 2 回、それ以上による分類によっても、それらの間に SOC 平均値間に有意差は認められなかった。

5) 地域での参加団体数・参加活動

地域での参加団体として青年団、ボランティア団体等、参加活動として冠婚葬祭、地域起こし活動等を例

示し、係るものすべてに○を付けさせ、その他に記入がある場合も○とし、○の数を数え上げた。さらに、団体と活動はそれぞれ構造と機能に対応するが、名称を挙げた場合には不明になることがあるので、それらの○の数を単に合算した。

しかし○の数が「0」（n=97）と「1 ≤」（n=138）の間には、SOC 平均値間に有意差は認められなかった。

8) 社会的サポート

同居人以外に付き合いのある間柄について、信頼できる人、心配してくれるだろうと予測できる人（受動的サポート）、自分が心配するであろうと考える人（能動的サポート）に当てはまる人に○を付けさせ、その他に記入がある場合も○とし、○の数を数え上げた。

信頼できる人の数、受動的サポート数、能動的サポート数のそれぞれ平均値によって回答者を 2 群に分類し、それぞれの SOC および 3 因子の平均値および検定結果を表 6-1～3 に示した。

しかし辛うじて、能動的サポート数で $p < .1$ 同処理可能感で $p < .05$ での有意差を確認できたのみであった。

表 6-1 信頼できる人の数（ave: 2.69）

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
>=3	48.1	17.6	14.3	16.2
<=2	48.2	17.2	14.0	16.9
p 値	0.934	0.491	0.687	0.172

表 6-2 受動的サポート数（ave: 2.07）

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
>=3	47.9	17.5	14.1	16.3
<=2	48.6	17.1	14.2	17.2
p 値	0.621	0.513	0.806	0.088

表 6-3 能動的サポート数（ave: 2.95）

	SOC 平均値	把握可能感	処理可能感	有意義感
>=3	46.4	17.0	13.3	16.1
<=2	49.0	17.6	14.6	16.9
p 値	0.051	0.405	0.017	0.128

IV 考 察

今回の学生プレテストでは、有意差水準を $p < .05$ に設定した場合、有意差が認められたのは「性別」、「同居者の有無」、「居住期間」、「居住地愛着」である。特に「居住期間」、「居住地愛着」では、 $p < .01$ 水準

の有意差が認められた。

女性よりも男性の方がSOC平均値は有意に高いという結果は、諸他の調査でも見られるが、今回の-2SD (SOC得点28)以下の男女比は1:1になり、全体的傾向と極端に低いSOC得点群の傾向では様相が異なっている。自殺率は、I市やMK市のみならず、一般的に「男性>女性」である。

同居者の存在は、一般的に孤独と利己主義の抑止力となるが、SOCを高支えるGRRsの一部をなすことが改めて示唆された。

「居住期間」と「居住地愛着」における有意差水準は、地域生活におけるGRRsの存在を示唆している。長期居住者と定住者は短期居住者よりもSOC平均値が有意に高いという結果は地域社会との連带的関係(地域的連帯)がSOCを高めることを示唆し、「住み続けたい」という地域への愛着は地域的連帯を支える要因のひとつである。

この点で、MK市の人口が1970年の大阪万博時をピークに減少し続けている事実⁸⁾は示唆的である。地域的連帯がともかく住民間の相互行為によって成立し、人口減少が地域的連帯に破壊的影響を及ぼすとするれば、MK市の自殺率の高止まり状態は地域的連帯の破壊が住民のSOCを低止まりさせている結果である、という仮説を立てることができる。この仮説の検証は、実際にMK市の住民のSOCを測定しなければ不可能である。

以上は、今回の学生プレテストの積極的な結果である。

しかし住民間の相互行為といっても、そこには紛争から協調まで多種多様な関係が含まれ、そのすべてがSOCを高支えるGRRsとなるわけではない。また相互行為の密度も地域内で均一であるとは想定しにくい。

今回設定した地域的連帯に関連する項目のうち、「居住形態」および「アルバイト頻度」では経済状態と活動頻度、「地域での参加団体数・参加活動」では地域活動との接点数、「社会的サポート」では協調関係のあり方について質問し、GRRsの絞込みを試みた。しかし様々な分類にもかかわらず、カテゴリー間にSOC平均値の有意差は認めることができなかった。

これら消極的な諸結果には、学生の居住地が他府県にまで分散し、地域の特徴に焦点を絞れなかったこと、学生と地域社会との関係が親や年長者により間接的になりがちであること、学業のための「一人暮らし」では地域との関係自体が希薄である、等々の要因を考え

ることができる。しかしこれらの問題は、両市の一般住民を対象とすることで解決可能であると考えられる。

しかし地域的連帯の複雑性を考慮するなら、本研究の主題が「自殺予防」にあることをより明確にし、対象者の理解を得ることが不可欠であり、それに沿った質問構成を工夫する必要がある。

またSOC得点は回答者の自殺抵抗力の指標であるとするれば、地域的連帯は地域の自殺抑止力に係る論点である。自殺高リスク者のスクリーニングのためには住民悉皆調査が目指されるべきであるが、実現可能性は低い。地域的連帯は地域社会に密着し、ある程度責任を負っている比較的少数の住民が中核になることが予想されるが、かれらのSOC平均値は高くなることが予想される。アンケート対象者の選定に、綿密な戦略が必要である。

最後に、今回の学生SOC平均値48は、山崎⁹⁾が示している成人男女のSOC13項目版の平均値57に比べ、低い結果であった。この結果は青春期にある学生の発展途上の数値であるとしても、医療現場に固有なストレスの強さを想定するなら座視できる数字ではない。調査を重ね、稿を改めて考察したい。

謝 辞

今回の調査実施が12月初旬という繰上げ定期試験や実習準備(3回生)、国家試験対策と模擬試験(4回生)が続く時期であったことを記し、緊張と疲労が募るなか、快くアンケートに協力してくれた学生諸君に心から感謝申し上げたい。

助成金

本研究は、藍野大学枠外研究資金による助成を受けている。

引用・参考文献

- 1) アントノフスキー, A. (山崎喜比古他訳). 健康の謎を解く: ストレス対処と健康保持のメカニズム. 東京: 有信堂高文社. 2001.
- 2) Antonovsky, A. The structure and properties of the sense of coherence scale. *Soc Sci Med* 1993; 36(6): 725-33.
- 3) Sack, M. et al. 「コヒアレンス感」に関する研究的側面. In: Schüffel, W. et al. 編 (橋爪誠訳) 健康生成論の理論と実践. 東京: 三輪書店; 2004. p161-9.
- 4) Eriksson, M. et al. Validity of Antonovsky's sense of coherence scale: a systematic review. *J Epidemiol Community Health*. 2005; 59 (6): 460-6.
- 5) 山本佳世子. 高校生のSOCと自殺親和性および死

- 生観の関係. 臨床死生学 2008 ; 13 : 35-40.
- 6) Petrie, K. et al. Sense of coherence, self-esteem, depression and hopelessness as correlates of reattempting suicide. Br J Clin Pshcol. 1992; 31 (Pt3) : 293-300.
- 6) Edwards, MJ. et al. Coping, meaning in life, and suicidal manifestations: examining gender differences. J Clin Pshcol. 2001; 57(12) : 1517-34.
- 8) 木下泰子他. 都市部における自殺の構造的解明：自殺率の異なる地区の社会・経済的要因の分析. 藍野学院紀要 2007 ; 21 : 47-57.
- 9) 山崎喜比古. 健康生成論と保健活動. 地域保健 1999 ; 30 (3) : 72-9.